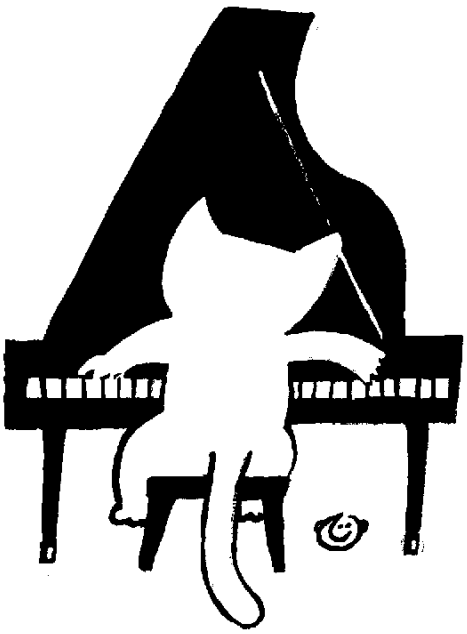
ねこふんじゃったの曲が聞きたいね

画家　小野寺　純一

ある春の日の午後、マグカップを片手に、何げなくテレビのスイッチを入れますと、どこか外国の駅においてあるピアノを、通りかかった人が弾くという番組をやっておりまして、腕におぼえのある通行人が思い思いの曲を、玄人はだしで、プロの方もいたりして、みごとな演奏に聞きいっていたとき、昔こんなシーンがあったことを思い出したんです。ピアノは今も昔も高額楽器でありまして、よほど裕福でないと家にはなかったのです。そんな中でピアノ演奏を習う人、特に女の子が多く、練習曲である「ねこふんじゃった」を伴奏を入れながら流れるように弾くんですね、おどろきました。学校の放課後や楽器売り場でも良くきこえましたね。この曲の作った人は不明で歌詞だけはあるという謎の曲でもあります。

我が家に一匹の猫がおりまして（→名前をサクラと申します。）、以前足もとが狂い、太い尻尾を思い切りふんだことがありまして、ギャッとさけんで爪で足をぶっつり刺され、血が流れるなど大さわぎになりましたが、そのあたりから私の位置は下僕となったようで、前のようにあまりなれこくなくなった気がするんです。この猫が我が家にやってきたのは平成 21 年の 4 月、ちょうど桜が満開で、大河原の家からもらってきました。そのおこりは、友人の還暦祝いで相馬漁港にあるカニ御殿での宴席で、製作会社の女性社長から「友人の家で生まれたばかりの猫がいるので、ひとめ見てほしい。人生かわるよ」といわれ、酔ったいきおいで、じゃあいってみましょうと返事、大満足のカニの宴は終了、全身カニの臭いが消



（絵：小野寺純一さん）

えた次の日曜、家内と大河原を尋ねたところ、一匹だけ美猫が残っておりまして、これがとんでもなくかわいいんですね。種類はノルウェージャンフォレストキャットで、聞くところによりますと、ノルウェーの森に棲み狩猟に長けた一族で、寒さから身を守るために長毛で、その佇まいは優雅で風格がただようのであります。なにより子猫ですので、どう育てたら良いものか、そこで頼りになるのが我らの図書館で、本と首っぴきでにわか勉強の成果もあって健やかにお育ちいただいております。カーテン登りに続くレール歩き、タンスの上を走りまわり、水道の出る水に興味をもったり、あそぶか寝るか、あの女性社長のいった人生かわるの意味がわかったんです。くらしに彩りと潤いと申しましょうか、たのしい毎日をおくっております。メディアでよく猫の駅長とかアンバサダーだとかになっているようですが、どんなもんでしょう。本来気ままなその日暮しの彼らにとって、迷惑でなければ良いなと思うばかり。我が家サクラも人間の歳で 70 をこえたようです。前のように軽快でなくなってきました。高齢家族の一員として健康で長生き、我らもサクラのためにもがんばって生きていきたいと思っております。